

インターナショナルオフィス×ダイバーシティ推進室「Schools and Education in Finland」を開催しました

2024 年 10 月 31 日（木）、フィンランドのムンッキニエミ中等教育学校高等部の生徒 7 名と教員 3 名が「Schools and Education in Finland」と題し、現地での生活と、フィンランドの教育制度などについて話しました。一行は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が実施する「国際青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプログラム）」により、香川大学インターナショナルオフィスが招へいし、初めて日本を訪れたものです。

はじめに生徒 2 名より、フィンランドは北ヨーロッパに位置すること、首都はヘルシンキ、人口約 554 万人、公用語はフィンランド語とスウェーデン語、通貨はユーロであること、また 1955 年に国際連合(UN)、1995 年に欧州連合(EU)、2023 年に北大西洋条約機構(NATO)に加盟したこと等が紹介されました。



ムンッキニエミ中等教育学校があるヘルシンキは、政治、経済、文化の中心地で、ヘルシンキ大聖堂、マーケット広場、大統領公邸があること等有名だそうです。なかでもおすすめの観光地はテンペリアウキオ教会(別名ロックチャーチ)という自然の岩を掘り抜いて建てられた教会で、教会内部の壁は岩肌がそのまま露出しているとのこと。自然と調和しているだけでなく、音響効果も高いためコンサートが行われることもあり、年間 50 万人以上が訪れる名所であると語ってくれました。また彼らの学校が大統領公邸と近く、地元のスーパーにアイスクリームを買いに来た Stubb 大統領と気さくに会話をしたことがあるそうです。

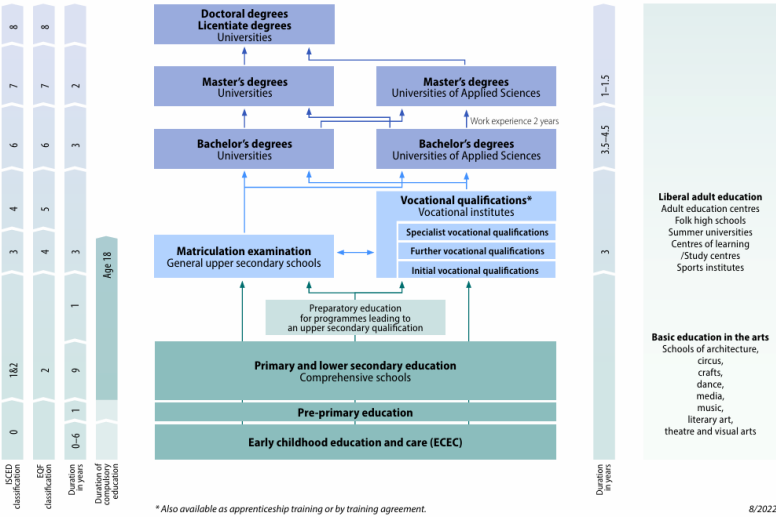
フィンランドはサウナの発祥地で、サウナ文化は国民の日常生活に深く根付いていて、健康やリラクゼーションだけではなく、家族や友人との団らんの場としても重要な役割を果たしていると説明がありました。サウナは家庭のほか、アパートやホテル、森の中の湖畔に設置されていて、Vihta(ヴィヒタ)と呼ばれる白樺の枝を束ねたもので、自分の肌をたたき、その香を楽しむことが伝統的なサウナの楽しみ方である、サウナで体を温めた後は、湖や海に入って体をクールダウンするのが最高に気持ちいい！ぜひ体験してもらいたい！と笑顔で話してくれました。



続いてムンッキニエミ中等教育学校の Aki Holopainen 校長より、フィンランドの教育について話がありました。フィンランドでは 6 歳になると就学前教育(Pre-primary education)が始まります。2015 年以前は義務ではありませんでしたが、現在は就学準備として参加が義務付けられています。7 歳～16 歳の初等および前期中等教育(Primary and lower secondary education)で 9 年間の基礎学校を終えると、16 歳～19 歳では後期中等教育(Upper secondary education)を受けます。ここでは大きく分けて二つの進路に分かれるそうです。一つは大学入学資格を得るための試験(Matriculation



EDUCATION SYSTEM IN FINLAND



Examination)に向けての教育を受ける高校への進学、二つ目が職業資格 (Vocational qualifications)取得に向けて実践的なスキルを身につけられる職業学校への道です。これらの教育はすべて無料で提供されており、希望があれば別の学校に入り直したり、キャリアチェンジをすることが可能で、将来の選択肢を広げられる柔軟性の高い仕組みとなっています。さらに前期中等教育を終えた学生で、後期中等教育に進むためのサポートが必要な学生へは、通常1年間、学生個々のニーズに合わせてカスタマイズされた基礎学

力やスキルを強化できるプログラム(Preparatory education for programmes leading to an upper secondary qualification)が提供されます。プログラム修了後は、高校または職業学校へ進むことができるということです。(Holopainen 校長が実際に使用された資料：[Finnish education system - OKM - Ministry of Education and Culture, Finland](#))



ここで副校長であり、三児の母でもある Merja Haavisto 先生が「フィンランドでは女性の大学進学率が男性を上回っているのをご存じですか?」と続け、フィンランドの幼児教育・保育(Early Childhood Education and Care)についてのお話がありました。主に幼児教育・保育を提供しているのは自治体で、親の就労、収入の有無にかかわらず子供たちは保育施設を利用する権利があり、教育・保育の平等性が念頭に置かれています。さらに自宅で3歳未満の子供の保育をしている家庭へは、育児を支えるための手当が支給されるそうです。(子供の人数や年齢によって加算もあり)

フィンランドの大学では年齢や背景に関係なく入学の機会を提供しており、学び直しを支援する制度もあるため、育児を終えた後でも大学進学を目指す方も多いとのこと。加えて高等教育も基本的無料であるため、家庭の経済力によって学業をあきらめる必要はなく、パートタイムやオンライン授業を選べる大学もあり、育児、仕事、学業が両立できる環境が整っていると話されました。

Sami Moglia 先生からはフィンランドの特別支援教育についての話がありました。現地のほぼすべての学校には、特別支援教員が配置されており、担任とは別にクラス/学校全体の子どものサポートに当たるそうです。担任や保護者、生徒自身の要望に応じて、子どもの様子を観察したり、苦手な分野に対しては個別/小グループで指導を行い、支援の必要性が感じられた時点ですぐに特別な支援が開始されるとのことです。クラスでサポートに当たる特別支援教員のほかに、特別支援教育の専門家(スクールサイコロジスト、スクールソーシャルワーカー、スクールナース)が各学校に配置されており、チームを組んで、支援が必要な子どもの情報共有や連携が行われていると話しました。



先生方の説明を受けて、生徒たちがそれぞれの教育段階での自身の体験を話してくれ、学生や教職員を含む18名の参加者との質疑応答もあって、フィンランドの魅力が詰まった有意義な講演会となりました。